

日蓮大聖人御書全集

ほうれんしょう

法蓮抄

新版
1412
ゝ
1432

ほうれんしょう

法蓮抄

けんじがんねん

がつ

さい

そやきようしん

建治元年('75)

4月

54歳

曾谷教信

そおも

夫れ以んみれば、法華經第四の法師品に云わく「もし悪人

あふぜんこころ

いつこうなか

げんぶつぜん

有って、不善の心をもつて、一劫の中において、現に仏前

つねほとけきめ

つみから

ひと

において、常に仏を毀罵せば、その罪はなお軽し。もし人、

ひとあくごん

ざいけしゅつけほけきようどくじゆ

もの

一つの悪言をもつて、在家・出家の法華經を讀誦する者を

きしつみ

おもとううんぬんみようらくだいしい

毀訾せば、その罪ははなはだ重し」等云々。妙樂大師云わ

きようくたかりぜつやく

せつな

く「しかもこの經の功高く理絶するに約して、この説を作

うよきようとううんぬん

すことを得。余經はしからず」等云々。

きやうもん

こころ

いつこう

にんじゅはちまんさい

この経文の心は、一劫とは、人寿八万歳ありしより、

ひやくねん

いつさい

捨

せんねん

じゅっさい

しだい

百年に一歳をすて、千年に十歳をすつ。かくのごとく次第

げん

にんじゅじゅっさい

じゅっさい

とき

に減ずるほどに、人寿十歳になりぬ。この十歳の時は、

とうじ

はちじゅう

おきな

にんじゅじゅっさい

ひやくねん

当時の八十の翁のごとし。また人寿十歳より、百年あ

じゅういつさい

ひやくねん

じゅうにさい

ないし

りて十一歳となり、また百年ありて十二歳となり、乃至

いっせんねん

にじゅっさい

ないしはちまんさい

一千年あらば二十歳となるべし。乃至八万歳となる。この

いちげんいちぞう

いつこう

もう

しゅじゅ

こう

一減一増を一劫とは申すなり。また種々の劫ありといえど

もう

もう

も、しばらくこの劫をもつて申すべし。

いつこう

あいだ

しん

く

い

さんごう

こと

ほとけ

この一劫が間、身・口・意の三業より事おこりて、仏を

憎

もの

れい

だいばだった

にくみたてまつる者あるべし。例せば提婆達多がごとし。

ほとけ じようぼんおう たいし だいばだった こくぼんおう こ きようだい

仏は浄飯王の太子、提婆達多は斛飯王の子なり。兄弟の

しそく ほとけ おん従兄弟 いま

子息なるあいだ、仏の御いここにておわせしかども、今も

むかし しょうにん ぼんぷ ひと なか 違 によにん

昔も、聖人も凡夫も、人の中をたがえること、女人より

お だいいち 怨

して起こりたる第一のあだにてはんべるなり。釈迦如来は

しつたたいし とき だいばだった おな たいし やしゆ

悉達太子としておわしし時、提婆達多も同じ太子なり。耶輸

だいじん むすめ やしゆだらによ 名 ごてんじくだいいち びじよ

大臣に女あり。耶輸多羅女となづく。五天竺第一の美女、

しかいめいよ てんによ しつた だいば とも きさき

四海名誉の天女なり。悉達と提婆と、共に後にせんことを

争 たま ゆえ なか悪 たま

あらそい給いし故に、中あしくならせ給いぬ。

のち しまった しゅつけ ほとけ 成 たま だいばだった しゅだ

後に悉達は出家して仏とならせ給い、提婆達多また須陀

比丘 びく し として出家し給いぬ。 しゅつけ たま ほとけ にひやくごじつかい たも

比丘を師として出家し給いぬ。 仏は二百五十戒を持ち、

さんぜん いぎ 調 たま もろもろ てんにん かつごう

三千の威儀をととのえ給いしかば、 諸の天人これを渴仰

ししゅ くぎよう だいばだった ひと 尊

し、四衆これを恭敬す。提婆達多を人たつとまざりしかば、

せけん めいよほとけ 過 励

いかにしてか世間の名誉仏にすぎんとはげみしほどに、と

あん 出 ほとけ せけん

こう案じいだして、 仏にすぎて世間にたつとまれぬべきこ

いっ しぶんりつ い いち ふんぞうえ に じようこつじき

と五つあり。四分律に云わく「一には糞掃衣、二には常乞食、

さん いちぎじき し じようろぎ ご しお ごみ う

三には一座食、四には常露座、五には塩および五味を受け

とううんぬん ほとけ ひと ほどこ ころも 受 たま だいばだった

ず」等云々。 仏は人の施す衣をうけさせ給い、提婆達多

ふんぞう え

ほとけ

ひと

ほどこ

じき

たま

だいば

は糞掃衣。 仏は人の施す食をうけ給い、 提婆はただ

じようこつじき

ほとけ

いちにち

いち

に

さんべん

じき

たま

だいば

常乞食。 仏は一日に一・二・三反も食せさせ給い、 提婆は

いちぎじき

ほとけ

ちようげん

じゆげ

しよ

たま

だいば

につちゆう

ただ一座食。 仏は塚間・樹下にも処し給い、 提婆は日中

じようろぎ

ほとけ

びんぎ

塩

ごみ

ふく

たま

常露座なり。 仏は便宜にはしおまたは五味を服し給い、

だいば

とう

ふく

せけん

だいば

ほとけ

提婆はしお等を服せず。 こうありしかば、 世間、 提婆の仏

うんてい

にすぐれたること雲泥なり。

ほとけ

うしな

窺

かくのごとくして仏を失いたてまつらんとうかがいし

びんばしやらおう

ほとけ

だんな

ひび

ごひやくりよう

くるま

ほどに、 頻婆舎羅王は仏の檀那なり。 日々に五百輛の車

すうねん

あいだいちど

欠

送

ほとけ

みでし

を数年が間一度もかかさずおくりて、 仏ならびに御弟子

とう くよう たてまつ

嫉 取

みしようおん

等を供養し奉る。これをそねみとらんがために、未生怨

たいし 語

ちち びんばしやらおう ころ

われ ほとけ ころ

太子をかたらつて父・頻婆舍羅王を殺させ、我は仏を殺さ

いし ほとけ う

しんごう

んとして、あるいは石をもつて仏を打ちたたてまつるは身業

ほとけ おうわく もの

めり くごう

ないしん

なり。「仏は誑惑の者」と罵詈せしは口業なり。内心より

しゆくせ あだ

いごう さんごうそうおう だいあく

宿世の怨とおもいしは意業なり。三業相応の大悪、これに

過

はすぐべからず。

だいばだった

だいあくにん さんごうそうおう いっちゅうこう あいだ

この提婆達多ほどの大悪人、三業相応して一中劫が間

しやかぶつ めり ちようちやく しつと そうら たいざい

釈迦仏を罵詈・打擲し嫉妬し候わん大罪は、いくらほど

おも そうろう だいち あつ じゅうろくまんはっせんゆじゆん

か重く候べきや。この大地は、厚さは十六万八千由旬な

り。されば、しだいはい みず くせん どしやく さんぜん そうもく四大海の水をも九山の土石をも三千の草木を

いっさいしゅじょう

ちようだい

そうら

お

傾

も一切衆生をも頂戴して候えども、落ちもせず、かたぶ

わ

そうろう

だいばだった

み

かず、破れずして候ぞかし。しかれども、提婆達多が身は

すで ごしやく じんしん

さんぎやくざい

およ

だいち

既に五尺の人身なり。わずかに三逆罪に及びしかば、大地

やぶ じごく い

あな てんじく

そうろう げんじようさんぞう

破れて地獄に入りぬ。この穴、天竺にいままだ候。玄奘三蔵、

かんど がっし しゅぎよう

見

さいいき もう ふみ の

漢土より月支に修行してこれをみる。西域と申す文に載せ

られたり。

ほけきよう

まつだい

ぎようじゃ

こころ

思

いろ

しかるに、法華經の末代の行者を、心にもおもわず、色

嫉

戯

罵

そうろう

かみ

だいばだった

にもそねまず、ただたわぶれてのりて候が、上の提婆達多

さんごうそうおう

いつちゅうこうほとけ

めり

たてまつ

過

がごとく三業相応して一中劫仏を罵詈し奉るにすぎて

そうろう

説

そうろう

とうせい

ひと

だいばだつ

候ととかれて候。いかにいわんや、当世の人の、提婆達

た

さんごうそうおう

だいくしん

たねん

あいだ

多がごとく三業相応しての大悪心をもつて、多年が間、

ほけきよう

ぎようじゃ

めり

きにく

しつと

ちようちやく

ざんし

もつし

法華經の行者を罵詈・毀辱・嫉妬・打擲・讒死・歿死に

あ

当てんをや。

と

い

まつだい

ほけきよう

ぎようじゃ

あだ

もの

問うて云わく、末代の法華經の行者を怨める者は、いか

じごく

お

なる地獄に墮つるや。

こた

い

ほけきよう

だいに

い

きよう

どくじゆ

しよじ

答えて云わく、法華經の第二に云わく「經を讀誦し書持

もの

きようせんぞうしつ

けっこん

いだ

することあらん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん

ないし ひと みようじゅう あびごく い いつこう ぐそく

乃至その人は命終して、阿鼻獄に入らん。一劫を具足し

こうつ

し

てんでん

むしゅこう

いた

とううんぬん

て、劫尽きなば、また死し、展転して無数劫に至らん」等云々。

だいち

しもごひやくゆじゅん

す

えんまおうぐう

えんま

この大地の下五百由旬を過ぎて炎魔王宮あり。その炎魔

おうぐう

しもいつせんごひやくゆじゅん

あいだ

はちだいじごく

王宮より下一千五百由旬が間に、八大地獄ならびに

いっぴやくさんじゅうろく

じごく

なか

いっぴやくにじゅうはち

じごく

一百三十六の地獄あり。その中に、一百二十八の地獄は

きようざい

もの

じゅうしよ

はちだいじごく

じゅうざい

もの

じゅうしよ

はち

軽罪の者の住处、八大地獄は重罪の者の住处なり。八

だいじごく

なか

しちだいじごく

じゅうあく

もの

じゅうしよ

だいはち

大地獄の中に、七大地獄は十悪の者の住处なり。第八の

むけんじごく

ごぎやく

ふこう

ひぼう

さんにん

じゅうしよ

いま

無間地獄は五逆と不孝と誹謗との三人の住处なり。今、

ほけきよう

まつだい

ぎようじや

けろん

めり

ひぼう

ひとびと

落

法華經の末代の行者を戲論にも罵詈・誹謗せん人々はおつ

と たま もん
べしと説き給える文なり。

ほけきよう だいし ほつしほん い ひとあ ふつどう もと
法華經の第四の法師品に云わく「人有つて仏道を求めて、

いつこう なか ないしじきようしや たんみ ふく かれ
一劫の中において乃至持經者を歎美せば、その福はまた彼

す とううんぬん みようらくだいしい のうらん もの こうべ
に過ぎん」等云々。妙樂大師云わく「もし悩乱する者は頭

しちぶん わ くよう もの ふくじゆうこう す とう
七分に破れ、供養することあらん者は福十号に過ぐ」等

うんぬん

云々。

そ にんちゆう てんりんじようおうだいいち りんおうしゆつげん たも
夫れ、人中には轉輪聖王第一なり。この輪王出現し給

ぜんそう たいかい なか うどんげ もう たいぼくお はな
うべき前相として、大海の中に優曇華と申す大木生いて、花

咲 み生 こんりんおうしゆつげん してん さんかい たい
さき実なる。金輪王出現して、四天の山海を平らかにす。

だいち わた

柔

たいかい かんろ

甘

大地は綿のごとくやわらかに、大海は甘露のごとくあまく、

たいせん こんぜん そうもく しっぱう

りんおう しゆゆ あいだ してんげ

大山は金山、草木は七宝なり。この輪王、須臾の間に四天下

還

てん しゆご

きじん きた

仕

りゆうおう

をめぐる。されば、天も守護し、鬼神も来つてつかえ、竜王

とき したが

あめ

れっぷ

したが

たてまつ

も時に随つて雨をふらす。劣夫なんども、これに従い奉

しゆゆ してんげ

てんりんおう

じゆうぜん

れば、須臾に四天下をめぐる。これひとえに転輪王の十善

かんとく

だいかほう

の感得せる大果報なり。

びしゃもんとう しだいてんのう

毘沙門等の四大天王は、またこれには似るべくもなき四

に

し

てんげ じざい だいおう

たいしやく

とうりてん

しゆ

だいろくてん

まおう

天下の自在の大王なり。帝釈は忉利天の主、第六天の魔王

よっかい いただき こ

さんがい

りよう

じようぼん

は欲界の頂に居して三界を領す。これは、上品の

じゆうぜんかい むしや だいぜん しょかん

十善戒、無遮の大善の所感なり。

だいぼんてんのう さんがい てんそん

しきかい いただき こ

まおう たいしやく

従

さんぜんだいせんかい

色界の頂に居して魔王・帝釈をしたがえ、三千大千界を

て 握

うろ ぜんじよう しゆぎよう

うえ

じ ひ き しゃ

手ににぎる。有漏の禅定を修行せる上に、慈・悲・喜・捨

し むりようしん

しゆぎよう

ひと

の四無量心を修行せる人なり。

しろうもん もう

しやりほつ

かしようとう

にひやくごじっかい

むろ

声聞と申して、舍利弗・迦葉等は、二百五十戒・無漏の

ぜんじよう うえ

く ぐう むじよう

む が かん

凝

さんがい

けんじ

禅定の上に、苦・空・無常・無我の觀をこらし、三界の見思

だん っ

すいか じざい

ゆえ ぼんのう

たいしやく

けんぞく

を断じ尽くし、水火に自在なり。故に梵王と帝釈とを眷属

とせり。

えんがく しろうもん

に

ひと

ほとけ

しゆつせ

縁覺は声聞に似るべくもなき人なり。仏と出世を

争 ひと むかしりようし

あらそう人なり。昔獵師ありき。飢えたる世に、利咤と申

しゃくしぶつ 稗 はん いっぱいくよう たてまつ か りようし

す辟支仏にひえの飯を一杯供養し奉って、彼の獵師、

くじゆういつこう あいだ にんちゆう てんじよう ちようじや う こんじよう

九十一劫が間、人中・天上の長者と生まる。今生には、

あなりつ もう てんげんだいいち みでし みようらくだいし しゃく

阿那律と申す天眼第一の御弟子なり。これを妙樂大師、釈

い ひえ はんかる たも っ

して云わく「稗の飯輕しといえども、有つところを尽くし、

たすぐ ゆえ すぐ ほう う とううんぬん

および田勝れたるをもつての故に、勝れたる報を得」等云々。

しゃく こころ 稗 はん かる たつと しゃくしぶつ

釈の心は、ひえの飯は輕しといえども、貴き辟支仏を

くよう ゆえ だいかほう たびたびう か

供養する故に、かかる大果報に度々生まるところを書かれて

そうら

候え。

ぼさつ もう

もんじゅ みろくとう

だいぼさつとう

また菩薩と申すは、文殊・弥勒等なり。この大菩薩等は、

か しゃくしぶつ に

だいじん

ほとけ しじゅうにほん

彼の辟支仏に似るべからざる大人なり。仏は四十二品の

むみよう もう やみ やぶ みようかく ほとけ

はちがつじゅうごや まんげつ

無明と申す闇を破る妙覚の仏なり。八月十五夜の満月の

ぼさつとう

しじゅういつぽん

むみよう

尽

とうかく

やま

ごとし。この菩薩等は、四十一品の無明をつくして等覚の山

いただき

登

じゅうしや つき

の頂にのぼり、十四夜の月のごとし。

ほとけ もう

かみ しよにん

ひやくせんまんおくばい

たま

仏と申すは、上の諸人には百千万億倍すぐれさせ給え

だいじん

ほとけ

かなら

さんじゅうにそう

そう

もう

る大人なり。仏には必ず三十二相あり。その相と申すは、

ぼんのんじよう

むけんちようそう

にくけいそう

びやくごうそう

ないしせんぷくりんそうとう

梵音声・無見頂相・肉髻相・白毫相、乃至千輻輪相等な

さんじゅうにそう

なか

いつそう

ひやくふく

じよう

たま

り。この三十二相の中の一相をば百福をもつて成じ給え

ひやくふく もう

だいい

にほんこく

かんど

ご

り。百福と申すは、たとい大医ありて、日本国・漢土・五

てんじく

じゅうろく

たいこく

ごひやく

ちゅうこく

じゅうせん

しょうこく

ないし

天竺・十六の大国・五百の中国・十千の小国、乃至

いちえんぶだい

してんげ

ろくよくてん

ないしさんぜんだいせんせかい

いつさいしゅじよう

一閻浮提・四天下・六欲天、乃至三千大千世界の一切衆生

まなこ

めしい

もと

いちじ

あ

の眼の盲たるを本のごとく一時に開けたらんほどの

だいくどく

ひと

ふく

ふくひやく

重

そうら

大功德を一つの福として、この福百をかさねて候わんを

さんじゅうにそう

なか

いつそう

じよう

いつそう

もつて、三十二相の中の一相を成ぜり。されば、この一相

くどく

さんぜんだいせんせかい

そうもく

かず

おお

してんげ

あめ

の功德は、三千大千世界の草木の数よりも多く、四天下の雨

あし

過

えこう

とき

そうぎやだ

もう

おおかぜ

の足よりもすぎたり。たとい壊劫の時、僧佉陀と申す大風あ

しゅみせん

ふ

ぬ

しきくきようてん

還

みじん

りて、須弥山を吹き抜いて色究竟天にあげて、かえつて微塵

おおかせ

となす大風なり。しかれども、仏の御身の一毛をば動かさ

ほとけ

おんむね

たいか

びようどうだいえ

たいちこうみよう

かきようざんまい

ず。仏の御胸に大火あり。平等大慧・大智光明・火坑三昧

い

ねはん

とき

たいか

むね

い

いっしん

や

と云う。涅槃の時は、この大火を胸より出だして一身を焼き

たま

ろくよく

しかい

てんじん

りゆうしゅとう

ほとけ

お

たてまつ

給いしかば、六欲・四海の天神・竜衆等、仏を惜しみ奉

ゆえ

おおあめ

ふ

さんぜん

だいち

みず

しゅ

る故にあつまりて大雨を下らし、三千の大地を水となし、須

み

なが

たいか

消

弥は流るといえども、この大火はきえず。

ほとけ

だいとく

あじやせおう

じゅうろく

仏にはかかる大徳ましますゆえに、阿闍世王は十六

だいこく

あくにん

あつ

いちしてんげ

げどう

語

だいば

し

大国の悪人を集め、一四天下の外道をかたらい、提婆を師と

むりよう

あくにん

はな

ぶつでし

罵

打

さつがい

して無量の悪人を放つて、仏弟子をのり、うち、殺害せし

けんおう

失

ちち

だいおう

いつしやく

くぎ

のみならず、賢王にてとがもなかりし父の大王を一尺の釘

しちしよ

打付

磔

せいぼ

おう

をもつて七処までうちつけ、はつつけにし、生母をば王の

髪状

かたな

こうべ

当

じゅうざい

積

あくそう

かんざしをきり刀を頭にあてし重罪のつもりに、悪瘡

しちしよ

い

さんしちにち

へ

さんがつ

なのか

だいちわ

むけん

七処に出でき。三七日を経て、三月の七日に大地破れて無間

じごく

お

いつこう

ふ

ほとけ

みもと

もう

あく

地獄に堕ちて一劫を経べかりしかども、仏の所に詣で、悪

そう癒

むけんじごく

だいく

免

しじゅうねん

瘡いゆるのみならず、無間地獄の大苦をまぬかれ、四十年の

じゅみょうの

ぎばだいじん

おん

使

ほのお

寿命延びたりき。また耆婆大臣も御つかいなりしかば、炎

なか

い

せんばちようじや

こ

と

い

の中に入って瞻婆長者が子を取り出だしたりき。これをも

おも

いちど

ほとけ

くよう

たてまつ

ひと

つてこれに思うに、一度も仏を供養し奉る人は、いかな

あくにん によにん

じようぶつとくどううたが

る悪人・女人なりとも、成仏得道疑いなし。

だいば さんじつそう

にそう欠

びやくごう

提婆には三十相あり。二相かけたり。いわゆる白毫と

せんぷくりん ほとけ にそうおと

でしとうかる おも

千輻輪となり。仏に二相劣りたりしかば、弟子等軽く思ひ

ほたるび

集

みけん

付

びやくごう

い

ぬべしとて、螢火をあつめて眉間につけて白毫と云い、

せんぷくりん かじ きくがた

作

あし っ

い

千輻輪には鍛冶に菊形をつくらせて足に付けて行くほどに、

あしや だいじ

けつくし

ほとけ もう

足焼けて大事になり、結句死せんとせしかば、仏に申す。

ほとけ みて

撫 たま

くつう去

仏、御手をもつてなで給いしかば、苦痛さりき。ここにて

かいげ おも

くどん なら

改悔あるべきかと思ひしに、さはなくして、「瞿曇が習う

くすし 小 賢

じゆつ

い

医師はこざかしかりけり。また術にてある」など云いしな

り。かかる敵にも仏は怨をなし給わず。いかにいわんや、

ほとけ いちど しん たてまつ もの

仏を一度も信じ奉る者をば、いかでか捨て給うべきや。

ほとけ

もくぞう

えぞう

写

たてまつ

うでんだいおう

かかる仏なれば、木像・画像にうつし奉るに、優填大王

もくぞう

あゆ

まとう

えぞう

いつさいきよう

と

たも

の木像は歩みをなし、摩騰の画像は一切経を説き給う。

ほど

たつと

きようしゆしやくそん

いつときふたとき

いちにちふつか

これ程に貴き教主釈尊を、一時二時ならず一日二日な

いっこう

あいだ

たなごころ

あ

りようがん

ほとけ

おんかお

当

らず一劫が間、掌を合わせ、両眼を仏の御顔にあて、

こうべ

た

たじ

す

こうべ

ひ

け

ほつ

頭を低れて、他事を捨てて、頭の火を消さんと欲するが

かつ

みず

思

う

じき

おも

ひまな

ごとく、渴して水をおもい飢えて食を思うがごとく、間無く

くよう

たてまつ

くどく

けろん

いちごん

ままはは

ままこ

褒

供養し奉る功德よりも、戯論に一言、継母の継子をほむ

まごころ

まつだい

ほけきよう

ぎようじゃ

ほ

るがごとく、心ざしなくとも、末代の法華經の行者を讃め

くよう

くどく

か

さんごうそうおう

しんじん

いつこう

あいだしようじん

供養せん功德は、彼の三業相応の信心にて一劫が間生身

ほとけ

くよう

たてまつ

ひやくせんまんおくばい過

と

たま

の仏を供養し奉るには百千万億倍すぐべしと説き給い

そうろう

みようらくだいし

ふくじゅうごう

す

か

て候。これを妙楽大師は「福十号に過ぐ」とは書かれ

そうろう

じゅうごう

もう

ほとけ

じゅう

みな

じゅうごう

て候なり。十号と申すは、仏の十の御名なり。十号を

くよう

まつだい

ほけきよう

ぎようじゃ

くよう

くどく

すぐ

供養せんよりも末代の法華經の行者を供養せん功德は勝

書

みようらくだいし

ほけきよう

いつさいきよう

すぐ

るとかかれたり。妙楽大師は法華經の一切經に勝れたる

にじゅう 集

ひと

いじよう

ことを二十あつむる、その一つなり已上。

かみ

ふた

ほうもん

ぶつせつ

そうら

こころ 得

上の二つの法門は、仏説にては候えども、心えられぬ

ことなり。いかでか、ほとけ 仏を供養し くよう 奉るよりも凡夫を供養 ぼんぷ くよう

するがまさるべきや。勝 しかれども、これを妄語もうごといわんと 言

すれば、釈迦如来の金言しやかによらい きんげんを疑い、多宝仏の証明うたが たほうぶつ しやうみようを輕しめ、 かる

じつぼうしよぶつ ぜつそう 破 十方諸仏の舌相をやぶるになりぬべし。もししからば、現身 げんしん

あびじこく お に阿鼻地獄に墮つべし。巖石がんせきにのぼりてあら馬を走らす 登 荒 うま はし

がごとし。しんかん 静 心肝しずかならず。また信しんぜば、妙覚みょうかくの仏にも

なりぬべし。いかにしてか、今度、法華經こんど ほけきよう しんじんに信心をとるべ 取

き。しん 信なくしてこの經きよう ぎようを行ぜんは、手なくして宝山て ほうざんに入り、 い

あし 足なくして千里せんり みちの道を企くわだつるがごとし。

ただし、近き現証を引いて遠き信を取るべし。仏の御歳

はちじゅう しょうがつついたち ほけきょう と たま おんものがたり

八十の正月一日、法華經を説きおわらせ給いて御物語あ

あなん みろく かしよう われよ い ほけきょう と

り。「阿難、弥勒、迦葉よ。我世に出でしことは法華經を説

われすで ほんかい 遂 いま よ せん

かんがためなり。我既に本懷をとげぬ。今は世にありて詮な

いまみつき にがつじゅうごにち ねはん うんぬん いっさいないげ

し。今三月ありて二月十五日に涅槃すべし」云々。一切内外

ひとびとが ぶつご 虚

の人々疑いをなせしかども、仏語むなしからざれば、つい

にがつじゅうごにち ごねはん ほとけ きんげん まこと

に二月十五日に御涅槃ありき。されば、仏の金言は実な

すこ しんじん 取 そうろう

りけるかと少し信心はとられて候。

ほとけしる たも われめつど のちいつびやくねん もう

また仏記し給う。「我滅度して後一百年と申さんに、

あいくだいおう　もう　おうしゆつげん

いちえんぶだいさんぶん　いち　しゆ

阿育大王と申す王出現して、一閻浮提三分の一が主となり

はちまんしせん　とう　た　わ　しやり　くよう　うんぬん

て、八万四千の塔を立て、我が舍利を供養すべし」と云々。

ひとうたが　もう　あん　しゆつげん　そうら

人疑い申さんほどに、案のごとくに出現して候いき。こ

しんじん　取　そうら　のたま

れよりしてこそ信心をばとりて候いつれ。また云わく「我

めつご　しひやくねん　もう　かにしかおう　もう　だいおう

が滅後に四百年と申さんに、迦式色迦王と申す大王あるべ

ごひやく　あらかん　あつ　ばしやるん　つく

し。五百の阿羅漢を集めて婆沙論を造るべし」と。これま

ぶつき　ほとけ　きもん　しん

た仏記のごとくなりき。これらをもつてこそ仏の記文は信

そうら

ぜられて候え。

かみ　あ　ふた　ほうもんもうご

もし上に挙ぐるところの二つの法門妄語ならば、この

いっきよう みなもうご

じゆりようほん

われ

か こひやくじんてんごう

一経は皆妄語なるべし。寿量品に「我は過去五百塵点劫の

ほとけ

と たも

われ

ぼんぷ

す

そのかみの仏なり」と説き給う。我らは凡夫なり。過ぎに

かた

う

このかた

覚

し方は、生まれてより已来すらなおおぼえず。いわんや

いっしょうにしよう

ごひやくじんてんごう

一生二生をや。いわんや五百塵点劫のことをば、いかでか

しん

しやりほつとう

しる

のたま

なんじ

みらいせ

信すべきや。また舍利弗等に記して云わく「汝は未来世に

むりようむへんふかしぎこう

す

ないしまさ

さぶつ

おいて、無量無辺不可思議劫を過ぎて乃至当に作仏するこ

う

な

けこうによらい

い

うんぬん

とを得べし。号づけて華光如来と曰わん」云々。またまた

ま かかしよう

しる

のたま

みらいせ

ないしさいごしん

摩訶迦葉に記して云わく「未来世において乃至最後身にお

じよう

ほとけ

え

な

こうみようによらい

いて、成じて仏となることを得ん。名づけて光明如来と

い うんぬん

きようもん

みらい

われ

曰わん」云々。これらの経文はまた未来のことなれば、我

ぼんぷ しん

覚

かこ みらい し

ら凡夫は信ずべしとおぼえず。されば、過去・未来を知ら

ぼんぷ

きよう しん

しゆぎよう

なに

ざらん凡夫は、この経は信じがたし。また修行しても何の

せん

おも

げんざい がんぜん

詮かあるべき。これをもつてこれを思うに、現在に眼前の

しようこ

ひと

きよう

と

とき

しん

ひと

証拠あらんずる人この経を説かん時は、信ずる人もありや

せん。

いま ほうれんしょうにん

おく

たま

ふじゆ

じよう

い

じぶ ゆうれい

今、法蓮上人の送り給える諷誦の状に云わく「慈父幽霊、

だいじゅうさんねん

きしん

あいあ

いちじようみようほうれんげきようごぶ

てんどく

第十三年の忌辰に相当たり、一乗妙法蓮華経五部を転読

たてまつ

とううんぬん

し奉る」等云々。

そ きょうしゅしやくそん だいかくせそん ごう せそん

夫れ、教主釈尊をば大覺世尊と号したてまつる。世尊と

もう そんな いちじ こう もう こう もう いちじ こう くん

申す尊の一字を高と申す。高と申す一字は、また孝と訓ず

いっさい こうよう ひと なか だいいち こうよう ひと

るなり。一切の孝養の人の中に第一の孝養の人なれば、世尊

ごう たてまつ しゃかによらい おんみ こんじき さんじゅうにそう そな

と号し奉る。釈迦如来の御身は金色にして三十二相を備

たも か さんじゅうにそう なか むけんちようそう もう ほとけ じようろく

え給う。彼の三十二相の中に無見頂相と申すは、仏は丈六

おんみ ちくじようげどう おんたけ 測 ぼんてん

の御身なれども、竹杖外道もその御長をはからず、梵天も

いただき み ゆえ むけんちようそう もう こうようだいいち だいにん

その頂を見ず。故に無見頂相と申す。これ孝養第一の大人

そう そな

なれば、かかる相を備えます。

こうきよう もう ふた いち げてん こうし もう せいじん

孝経と申すに二つあり。一には外典の孔子と申せし聖人

しよ こうきよう

に

ないてん

いま

ほけきよう

ないげ

の書に孝経あり。二には内典。今の法華経これなり。内外

こと

こころ

おな

しやくそん

じんてんごう

あいだしゆぎよう

異なれども、その意はこれ同じ。釈尊、塵点劫の間修行

ほとけ

成

励

なにごと

こうよう

して仏にならんとはげみしは何事ぞ。孝養のとなり。し

ろくどうしししよう

いつさいしゆじよう

みなふ ぼ

こうよう 終

かるに、六道四生の一切衆生は皆父母なり。孝養おえざり

ほとけ

たま

しかば、仏にならせ給わず。

いま

ほけきよう

もう

いつさいしゆじよう

ほとけ

ひじゆつ

今、法華経と申すは、一切衆生を仏になす秘術ましま

おんきよう

じごく

ひとり

がき

ひとり

ないしくかい

す御経なり。いわゆる、地獄の一人、餓鬼の一人、乃至九界

ひとり

ほとけ

いつさいしゆじようみなほとけ

理

の一人を仏になせば、一切衆生皆仏になるべきことわり

あらわ

たと

たけ

ふし

ひと

わ

よ

ふし

わ

顕る。譬えば、竹の節を一つ破りぬれば、余の節また破る

るがごとし。 囲碁と申すあそびにしちようということあり。

ひと いしし おお いしし ほけきよう

一つの石死しぬれば、 多くの石死しぬ。 法華経もまたかく

かね もう きくさ うしな ゆう そな みず いっさい

のごとし。 金と申すものは本草を失う用を備え、 水は一切

ひ 消 とく ほけきよう いっさいしゅじよう ほとけ ゆう

の火をけす徳あり。 法華経もまた一切衆生を仏になす用

ろくどうししよう しゅじよう なんによ なんによ みな

おわします。 六道四生の衆生に男女あり。 この男女は皆、

われ せんじよう ふぼ ひとり 漏 ほとけ

我らが先生の父母なり。 一人ももれば仏になるべからず。

ゆえ にじよう ふちおん もの さだ なが じようぶつ と

故に二乗をば不知恩の者と定めて、「永く成仏せず」と説か

たも こうよう こころ 遍 ゆえ ほとけ ほけきよう

せ給う。 孝養の心あまねからざる故なり。 仏は法華経を

覚 たま ろくどうししよう ふぼ こうよう くどく み そな たま

さとらせ給いて、 六道四生の父母孝養の功徳を身に備え給

えり。

ほとけ おんくどく

ほけきよう

しん

ひと

譲

たも

この仏の御功德をば、法華經を信ずる人にゆずり給う。

れい

ひも く

もの にゆう

あかご

やしな

例せば、悲母の食う物の乳となりて赤子を養うがごとし。

いま

さんがい

みな

わ

う

なか

しゅじよう

「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、こ

わ こ

とううんぬん

きようしゅしやくそん

くどく

とごとくこれ吾が子なり」等云々。教主釈尊は、この功德

ほけきよう

もんじ

いつさいしゅじよう

くち

嘗

たも

を法華經の文字となして、一切衆生の口になめさせ給う。

あかご すい

か

弁

どく

やく

し

にゆう

赤子の水・火をわきまえず、毒・薬を知らざれども、乳を

ふく

しんみよう

続

あごんぎよう

なら

しやりほつとう

含めば身命をつぐがごとし。阿含經を習うことは舍利弗等

けごんきよう

解

げだつがつとう

のごとくならざれども、華嚴經をさとること解脱月等のご

ないしいちだいしようぎよう　むね　う

とくならざれども、乃至一代聖教を胸に浮かべたること

もんじゆ

いちじいつく

き　ひと

文殊のごとくならざれども、一字一句をもこれを聞きし人、

ほとけ

か　ごせん　じようまん

き　解

仏にならざるはなし。彼の五千の上慢は、聞いてさとら

ふしん　ひと

ぼう

みつぎ　へ

ず、不信の人なり。しかれども、謗ぜざりしかば、三月を経

ほとけ

しん

しん

すなわ

て仏になりనికి。「もしは信ずるも、もしは信ぜざるも、則

ふどうこく　しょう

ねはんぎよう

と

ひと

ち不動国に生ぜん」と涅槃經に説かるるは、この人のこと

ほけきよう

ふしん　もの

ぼう

き

なり。法華經は、不信の者すら、謗ぜざれば、聞きつるが

ふしぎ

ほとけ

しちほだ

は

ひと

不思議にて仏になるなり。いわゆる七步蛇に食まれたる人、

いっばないししちほ

過

どく

よう

ふしぎ

はっば

過

一步乃至七步をすぎず。毒の用の不思議にて八歩をすごさ

ぬなり。また胎内の子の七日のごとし。必^{かな}ず七日の内^なに転^{うち}

じて余の形となる。八日をすごさず。

いま ほうれんしょうにん きょうしゅしやくそん

今の法蓮上人も、またかくのごとし。教主釈尊の

おんくどく おんみ い 替 たま ほうれんしょうにん おんみ

御功德、御身に入りかわらせ給いぬ。法蓮上人の御身は

かこしょうりよう ごようぼう のこ 置 たね

過去聖霊の御容貌を残しおかれたるなり。たとえば、種の

なえ はな み はな お み

苗となり、花の菓となるがごとし。その花は落ちて菓はあ

たね 隠 なえ げん み ほうれんしょうにん おんくどく かこ

り。種はかくれて苗は現に見ゆ。法蓮上人の御功德は過去

しょうりよう おんたから まつ 栄 かしわ 喜 しば 枯

聖霊の御財なり。松さかうれば柏よろこぶ。芝かるれ

らん 泣 こころ そうもく

ば蘭なく。情なき草木すら、かくのごとし。いかにいわん

こころ

ふし ちぎ

や、情あらんをや。また父子の契りをや。

か ふじゆ い じ ふへいげん あした だいじゆうさんねん きしん

彼の諷誦に云わく「慈父閉眼の朝より第十三年の忌辰

いた しゃかによらい みまえ みずか じ がげいっかん

に至るまで、釈迦如来の御前において、自ら自我偈一卷を

どくじゆ たてまつ しょうりよう えこう とううんぬん

読誦し奉つて聖靈に回向す」等云々。

とうじ にほんこく ひと ぶつぼう しん み そうち

当時、日本国の人、仏法を信じたるようには見えて候え

いにしえ ぶつぼう 渡 とき ほとけ もう

ども、古いまだ仏法のわたらざりし時は、仏と申すこと

ほう もう し そうち もりや じようぐうたいし

も法と申すことも知らず候いしを、守屋と上宮太子と

かつせん のち しん ひと しん かんど

合戦の後、信ずる人もあり、また信ぜざるもあり。漢土も

まとう かんど い のち どうし じようろん

かくのごとし。摩騰、漢土に入つて後、道士と諍論あり。

どうし負

はじ

しん

ひと

ふしん

ひと

道士まけしかば、始めて信ずる人もありしかども、不信の人

おほ

多し。

おりよう

もう

のうしよ

しゆせき

じようず

ひと

されば、烏竜と申せし能書は手跡の上手なりしかば、人こ

もち

ぶつきよう

えこ

れを用いる。しかれども、仏經においてはいかなる依怙あ

か

さいごりんじゆう

とき

しそく

いりよう

め

い

りしかども書かず。最後臨終の時、子息・遺竜を召して云

なんじ

わ いえ

う

げいのう

継

わ

こうよう

わく「汝、我が家に生まれて芸能をつぐ。我が孝養には

ぶつきよう

か

こと

ほけきよう

か

わ

仏經を書くべからず。殊に法華經を書くことなかれ。我が

ほんし

ろうし

てんそん

てん

ふた

ひ

か

本師の老子は天尊なり。天に二つの日なし。しかるに、彼の

きよう

われいちにん

と

奇

怪

だいいち

ゆいごん

經に『ただ我一人のみ』と説く。きかい第一なり。もし遺言

を違たがえて書かくほどならば、たちまちに悪霊あくりようとなりて命いのちを

断たつべし」と云いつて、舌八したやっつにさ裂けて、頭七分こうべしちぶんに破われ、五

根こんより血ちを吐はいて死しし畢おわんぬ。されども、その子こ、善悪ぜんあくを

弁わえざれば、我が父ちちの謗法ほうぼうのゆえに悪相現あくそうげんじて阿鼻地獄あびじごくに

墮おちたりともし知らず。遺言ゆいごんにまかせて仏經ぶつきようを書かくことなし。

いわんや口くちに誦じゆすることあらんをや。

かく過すぎ行いくほどに、時ときの王おうを司馬氏しばしと号ごうし奉たてまつる。

御仏事ごぶつじのありしに、書写しよしやの經きようあるべしとて漢土第一かんどだいいちの能書のうしよ

を尋たずねらるるに、遺いりよう竜さだに定まりぬ。召めして仰おおせ付けらるる

さいさんじたいもう

ちからおよ

たしつ

いちぶ

きよう

に、再三辞退申せしかば、力及ばずして他筆にて一部の経

か

ていおうこころ

いりよう

め

を書かせられけるが、帝王心よからず。なお遺竜を召して

おお

い

なんじ

おや

ゆいごん

ちん

きよう

か

仰せに云わく「汝、親の遺言とて朕が経を書かざること、

いわ な

めん

その謂れ無しといえども、しばらくこれを免ず。ただし、

だいもく

か

さんどちよくじよう

いりよう

じたいもう

題目ばかりは書くべし」と三度勅定あり。遺竜なお辞退申

だいおう りようがんこころ

い

てんち

おう

しんたい

す。大王、竜顔心よからずして云わく「天地なお王の進退

なんじ

おや

すなわ

わ

けにん

わたくし

なり。しかれば、汝が親は即ち我が家人にあらずや。私

くじ かる

だいもく

をもつて公事を軽んずることあるべからず。題目ばかりは

か

ぶつじ

にわ

すみ

書くべし。もししからずんば、仏事の庭なりといえども、速

なんじ こうべ は

だいもく

か

やかに汝が頭を刎ぬべし」とありければ、題目ばかり書け

みようほうれんげきようかんだいいち ないしかんだいはちとううんぬん

り。いわゆる、妙法蓮華経卷第一、乃至卷第八等云々。

く したく かえ なげ い われ おや ゆいごん そむ

その暮れに私宅に帰つて歎いて云わく「我、親の遺言を背

おうちよくすべ ゆえ ぶつきよう か ふこう もの

き、王勅術なき故に、仏経を書いて不孝の者となりぬ。

てんじん ちぎ さだ いか ふこう もの 思

天神も地祇も、定めて瞋り、不孝の者とおぼすらん」とて寝

よ ゆめ なか だいこうみようしゅつげん あさひ て おも

ぬる夜の夢の中に大光明出現せり。朝日の照らすかと思

てんにん いちにん にわじよう た たま むりよう けんぞく

えば、天人一人、庭上に立ち給えり。また無量の眷属あり。

てんにん ちようじよう こくう ほとけろくじゅうしぶつ

この天人の頂上の虚空に仏六十四仏まします。

いりよう がっしよう と い てんにん

遺竜、合掌して問うて云わく「いかなる天人ぞや」。

こた い われ なんじ ちち おりよう ぶつぽう ぼう
答えて云わく「我はこれ、汝が父の烏竜なり。仏法を謗

ゆえ したやつ 裂 ごこん ち い こうべしちぶん
ぜし故に、舌八つにさけ、五根より血を出だし、頭七分に

わ むけんじごく お か りんじゆう だいく かんいん
破れて、無間地獄に堕ちぬ。彼の臨終の大苦をこそ堪忍す

覚 むけん く ひやくせんおくばい
べしとおおぼえざりしに、無間の苦はなお百千億倍なり。

にんげん どんとう つめ 放 のこぎり くび 切
人間にして、鈍刀をもつて爪をはなち、鋸をもつて頸をき

すみび うえ あゆ とげ 込 ひと く
られ、炭火の上を歩ばせ、棘にこめられんどせし人の苦を、

く 比 数
この苦にたとえばかずならず。いかにしてか我が子に告げ

おも 叶 りんじゆう とき なんじ いまし
んと思ひしかどもかなわず。臨終の時、汝を誡めて

ぶつきよう か ゆいごん 悔 もう
『仏經を書くことなかれ』と遺言せしことのくやしき、申

すばかりなし。後悔先にたたず。我が身を恨み、舌をせめ

しかども、かいなかりしに、昨日の朝より法華經の始めの

妙の一字、無間地獄のかなえの上に飛び来つて、変じて

金色の釈迦仏となる。この仏、三十二相を具し、面貌満月

のごとし。大音声を出だして説いて云わく『たとい、法界

に遍き、善を断ちたる諸の衆生も、一たび法華經を聞か

ば、決定して菩提を成ぜん』云々。この文字の中より大雨

降つて無間地獄の炎をけす。閻魔王は冠をかたぶけて

敬い、獄卒は杖をすてて立てり。一切の罪人はいかなるこ

慌

ほう

いちじきた

さき

とぞとあわてたり。また法の一字来れり。前のごとし。ま

れん

け

きよう

ろくじゅうしじきた

た蓮、また華、また経、かくのごとく、六十四字来つて

ろくじゅうしづつ

むけんじごく

ほとけろくじゅうしたい

六十四仏となりぬ。無間地獄に仏六十四体ましまして、

にちがつ

ろくじゅうしそら

い

てん

かんろ

下

日月の六十四天に出でたるがごとし。天より甘露をくだし

ざいにん

あた

たいぜん

て罪人に与う。『そもそも、これらの大善はいかなることぞ』

ざいにんとう

ほとけ

と

たてまつ

ろくじゅうし

ほとけ

こた

と、罪人等、仏に問い奉りしかば、六十四の仏の答え

のたま

われ

こんじき

み

せんだんほうせん

しゅつげん

に云わく『我らが金色の身は梅檀宝山よりも出現せず。

むけんじごく

おりよう

こ

いりよう

か

ほけきようはちかん

これは無間地獄にある烏竜が子の遺竜が書ける法華経八卷

だいもく

はつぱろくじゅうし

もんじ

か

いりよう

て

おりよう

う

の題目の八八六十四の文字なり。彼の遺竜が手は烏竜が生

めるところの身分なり。しんぶん 書ける文字は烏竜が書くにてあるか もんじ おりよう か

なり』と説き給いしかば、無間地獄の罪人等は、『我らも娑婆と たま むけんじごく さいにんとう われ しやば

にありし時は、子もあり、婦もあり、眷属もありき。いかとき こ つま けんぞく

にとぶらわぬやらん、また訪えども善根の用の弱くして来訪 とぶら なげ かい ぜんこん ゆう よわ きた

らぬやらんと、歎けども歎けども甲斐なし。あるいは一日ふっか いちねんにねん はんこういつこう ぜんちしき

二日、一年二年、半劫一劫になりぬるに、かかる善知識にたてまつ たす われ けんぞく とう

あい奉って助けられぬる』とて、我らも眷属となりて切りてん 上 なんじ 拝 きた 語

利天にのぼるか、まず汝をおがまんとて来るなり」とかたゆめ なか 嬉 み 余 わか のち

りしかば、夢の中にうれしさ身にあまりぬ。別れて後、ま

たいつの世にか見んと思ひし親のすがたをも見奉り、よ み おも おや 姿 み たてまつ ほとけ 仏

をも拝し奉りぬ。はい たてまつ

ろくじゅうしぶつ ものがたり い われ べつ しゆ なんじ われ
六十四仏の物語に云わく「我らは別の主なし。汝は我ら

檀那なり。今日よりは汝を親と守護すべし。汝おこたる
だんな きよう なんじ おや しゆご なんじ 怠

ことなかれ。一期の後は必ず来つて都率の内院へ導くべ
いちご のち かなら きた とそつ ないいん みちび

し」と御約束ありしかば、遺竜ことに畏みて誓つて云わ
おんやくそく いりよう 殊 かしこ ちか のたま

く「今日以後、外典の文字を書くべからず」等云々。彼の世親
こんにちいご げてん もんじ か とううんぬん か せしん

菩薩が小乗経を誦せじと誓ひ、日蓮が弥陀念仏を申さじ
ぼさつ しょうじようきよう じゆ ちか にちれん みだねんぶつ もう

と願ぜしがごとし。がん

ゆめ 覚

よし

おう

もう

だいおう

ちよくせん

い

さて夢さめて、この由を王に申す。大王の勅宣に云わく

ぶつじ

じよう

よし

がんもん

か

たてまつ

「この仏事すでに成じぬ。この由を願文に書き奉れ」と

ちよくせん

かんど

にほんこく

ほけきよう

ありしかば、勅宣のごとし。さてこそ漢土・日本国は法華經

たま

じよう

かんど

ほつけでんき

そうろう

にはならせ給いけれ。この状は漢土の法華伝記に候。

しよしや

くどく

ごしゆほつし

なか

しよしや

さいげ

これは書写の功德なり。五種法師の中には、書写は最下の

くどく

どくじゆ

もう

むりようむへん

功德なり。いかにいわんや、読誦なんと申すは無量無辺の

くどく

いま

せしゆ

じゆうさんねん

あいだ

まいあさどくじゆ

功德なり。今の施主、十三年の間、毎朝読誦せらるる

じがげ

くどく

ほとけ

ほとけ

よ

くじん

自我偈の功德は、「ただ仏と仏とのみ、いまし能く究尽し

たまえり」なるべし。

そ ほかきよう いちだいしようぎよう こつずい じがげ にじゅうはつぽん
夫れ、法華経は一代聖教の骨髓なり。自我偈は二十八品

魂

さんぜ しょうぶつ じゅうりようほん いのち じつぽう

のたましいなり。三世の諸仏は寿量品を命とし、十方の

ぼさつ じがげ がんもく じがげ くだく わたくし もう

菩薩も自我偈を眼目とす。自我偈の功德をば私に申すべ

つぎしも ふんべつくだくほん の

じがげ

からず。次下に分別功德品に載せられたり。この自我偈を

ちようもん ほとけ 成 ひとびと かず 挙 そうろう

聴聞して仏になりたる人々の数をあげて候には、

しょうせん たいせん さんぜんせかい みじん かず そうら

小千・大千・三千世界の微塵の数をこそあげて候え。そ

うえ やくおうほん いげ ろつぽんとくどう じがげ よざん

の上、薬王品已下の六品得道のもの、自我偈の余残なり。

ねはんぎようしじっかん なか あつ そうら ごじゅうにるい じがげ

涅槃経四十巻の中に集まつて候いし五十二類にも、自我偈

くだく ほとけ かさ と たま じがげ

の功德をこそ仏は重ねて説かせ給いしか。されば、初め

じやくめつどうじよう

じつほうせかいみじんじゆ

だいぼさつ

てんにんとう

くも

寂滅道場に十方世界微塵数の大菩薩・天人等、雲のごと

あつ

そうら

だいじゆう

だいほん

しよしよう

だいにちきよう

くに集まつて候いし大集・大品の諸聖も、大日経・

こんごうちようきようとう

せんにひやくよそん

かこ

ほけきよう

じがげ

金剛頂経等の千二百余尊も、過去に法華経の自我偈を

ちようもん

ひとびと

しんりき

弱

さん

ご

じんてん

へ

聴聞してありし人々、信力よわくして三・五の塵点を経し

こんどしやかぶつ

あ

たてまつ

ほけきよう

くどく

ゆえ

かども、今度釈迦仏に値い奉つて、法華経の功德すすむ故

りようせん

待

にぜん

きようぎよう

えん

とくどう

に、靈山をまたずして爾前の経々を縁として得道なると

み

見えたり。

じつほうせかい

しよぶつ

じがげ

し

ほとけ

成

されば、十方世界の諸仏は、自我偈を師として仏になら

たも

せかい

ひと

ふぼ

いま

ほけきようじゆりようほん

たも

せ給う。世界の人の父母のごとし。今、法華経寿量品を持

ひと　しよぶつ　いのち　つ　ひと　わ　とくどう　きよう　たも

つ人は、諸仏の命を續ぐ人なり。我が得道なりし經を持つ

ひと　す　たも　ほとけ　す　たま　ほとけかえ

人を捨て給う仏あるべしや。もしこれを捨て給わば、仏還

わ　み　す　たも　おも

つて我が身を捨て給うなるべし。これをもつて思うに、

たむら　としひと　つわもの　さんぜんにん　う　によにん

田村・利仁なんどのようなる兵を三千人生みたらん女人

によにん　かたき　ひと　さんぜんにん　しようぐん

あるべし。この女人を敵とせん人は、この三千人の將軍を

敵　受　ほけきよう　じがげ　たも　ひと　かたき

かたきにうくるにあらずや。法華經の自我偈を持つ人を敵

さんぜ　しよぶつ　かたき

とせんは、三世の諸仏を敵とするになるべし。

いま　ほけきよう　もんじ　みな　しょうじん　ほとけ　われ　にくげん

今の法華經の文字は皆、生身の仏なり。我らは肉眼な

もんじ　み　がき　ごうが　ひ　み　ひと

れば文字と見るなり。たとえば、餓鬼は恒河を火と見る。人

みず み てんにん かんろ み
は水と見、天人は甘露と見る。水は一なれども、果報にし

み おのおのべつ ほけきよう もんじ もうもく
たがって見るところ 各別なり。この法華經の文字は、盲目

もの み にくげん こくしよく み にじよう こくう み
の者はこれを見ず。肉眼は黒色と見る。二乗は虚空と見、

ぼさつ しゅじゆ しき み ぶつしゅじゆんじゆく ひと ほとけ みたてまつ
菩薩は種々の色と見、仏種純熟せる人は仏と見奉る。

きようもん い よ たも すなわ
されば、經文に云わく「もし能く持つことあらば、則ち

ぶつしん たも とううんぬん てんだい い けいしゆ
仏身を持つ」等云々。天台云わく「稽首したてまつる、

みようほうれんげきよういちちつ はちじく ししちほん ろくまんきゆうせんさんびやくはちじゆうし
妙法蓮華經一帙・八軸・四七品・六万九千三百八十四。

いちいちもんもん しんぶつ しんぶつ ほう と しゅじよう り
一々文々これ真仏なり。真仏、法を説いて衆生を利したも

とう か そうろう
う」等と書かれて候。

あん

ほうれんほつし

まいあさくち

これをもつてこれを案ずるに、法蓮法師は毎朝口より

こんじき

もんじ

い

あらわ

もんじ

ごひやくじゆうじ

金色の文字を出だし現す。この文字の数は五百十字なり。

いちいち

もんじへん

にちりん

にちりんへん

しやかによらい

一々の文字変じて日輪となり、日輪変じて釈迦如来となり、

だいこうみよう

はな

だいち

突

通

さんあくどう

むけんだいじよう

て

大光明を放つて大地をつきとおし、三悪道・無間大城を照

ないしとうざいなんぼく

じようほう

む

ひそうひひそう

らし、乃至東西南北、上方に向かつては非想非非想へも

上

ところ

かこしよりよう

ところ

のぼり、いかなる処にも過去聖霊のおわすらん処まで

たずい

たま

か

しよりよう

かた

たも

われ

たれ

尋ね行き給いて、彼の聖霊に語り給うらん。「我をば誰と

おぼ

われ

なんじ

しそく

ほうれん

まいあさじゆ

か思しめす。我はこれ汝が子息・法蓮が毎朝誦するところ

ほけきよう

じがげ

もんじ

もんじ

なんじ

まなこ

の法華経の自我偈の文字なり。この文字は、汝が眼とな

らん、耳みみとならん、足あしとならん、手てとならん」とこそ、ね

んごろに語らせ給うらめ。その時、過去聖靈は、「我が

しそく ほうれん こ ぜんちしき

しやばせかい

子息・法蓮は、子にはあらず、善知識なり」とて、娑婆世界

む 押 たも まこと こうよう

に向かつておがませ給うらん。これこそ実の孝養にては

そうろう

候なれ。

そもそも、法華經を持つと申すは、經は一なれども持つ

とき したが いろいろ ほうけきよう たも もう きよう いち たも

ことは時に随つて色々なるべし。あるいは身肉をさいて師

くよう ほとけ とき み とこ し くよう

に供養して仏になる時もあり。また身を牀として師に供養

み たきぎ きよう じようぼく 被

し、また身を薪となし、またこの經のために杖木をかぼ

しょうじん

り、また精進し、また持戒し、上のごとくすれども仏に

じかい

かみ

ほとけ

とき

とき

ふじょう

てんだい

ならぬ時もあり。時によつて不定なるべし。されば、天台

だいし

とき

かん

か

しょうあんだいし

しゅしやよろ

大師は「時に適うのみ」と書かれ、章安大師は「取捨宜し

え

いっこう

とううんぬん

きを得て、一向にすべからず」等云々。

と

い

とき

みにく

くよう

とき

問うて云わく、いかなる時か身肉を供養し、いかなる時か

じかい

持戒なるべき。

こた

い

ちしや

もう

とき

し

答えて云わく、智者と申すは、かくのごとき時を知つて

ほけきよう

ぐつう

だいいち

ひじ

かわ

もの

法華経を弘通するが第一の秘事なり。たとえば、渴ける者は、

みず

もち

きゆうせんひようじよう

由

はだか

もの

水こそ用いることなれ。弓箭兵杖はよしなし。裸なる者

は衣を求む。水は用なし。一をもつて万を察すべし。大鬼神

ほけきよう

ぐつう

みふせ

よえじきせん

ありて法華經を弘通せば、身を布施すべし。余の衣食は詮な

あくおう

ほけきよう

うしな

しんみよう

喪

したが

し。悪王あつて法華經を失わば、身命をほろぼすとも随

じかい

しやうじん

だいそうとう

ほけきよう

ぐつう

うべからず。持戒・精進の大僧等、法華經を弘通するよう

うしな

し

せ

ほけきよう

にてしかも失うならば、これを知つて責むべし。法華經に

い

われ

しんみよう

あい

むじようどう

お

うんぬん

云わく「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」云々。

ねはんぎよう

い

しんみよう

うしな

つい

おう

と

涅槃經に云わく「むしろ身命を喪うとも、終に王の説く

ぎんきよう

かく

とううんぬん

しやうあんだいしい

ところの言教を匿さず」等云々。章安大師云わく「『むし

しんみよう

うしな

おし

かく

み

かる

ほう

おも

ろ身命を喪うとも、教えを匿さず』とは、身は軽く法は重

し。身みを死ころして法ほうを弘ひろむ」等とううんぬん云々。

いま にちれん げけん

にほんだいいち

しかるに、今、日蓮は、外見のごとくんば、日本第一の

びやくにん

わ ちようろくじゆうろつかこく

ふた

しま

ひやくせんまんおく

し

僻人なり。我が朝六十六箇国・二つの島の百千万億の四

しゆ

じようげばんにん

あだ

ぶつぼうにほんこく

わた

しちひやくよねん

衆、上下万人に怨まる。仏法日本国に渡って七百余年、い

ほど

ほけきよう

ゆえ

しよにん

にく

もの

がつ

まだこれ程に法華經の故に諸人に悪まれたる者なし。月

し かんど

聞

覺

氏・漢土にもありともきこえず。また、あるべしともおぼえ

いちえんぶだいだいいち

びやくにん

ず。されば、一閻浮提第一の僻人ぞかし。かかるものなれ

かみ

いっちよう

い

おそ

しも

ばんみん

あざけ

かえり

ば、上には一朝の威を恐れ、下には万民の嘲りを顧みて、

しんるい

訪

よそびと

もう

およ

しゆつせ

おん

親類もとぶらわず。外人は申すに及ばず、出世の恩のみな

せけん おん こうむ ひと しょにん まなこ おそ くち 塞

らず世間の恩を蒙りし人も、諸人の眼を恐れて、口をふさ

こころ おも 謗 由 すうどこと

がんためにや、心に思わねどもそしるよしをなす。数度事

遇 りようどごかんき こうむ わ み とが あ

にあい、両度御勘気を蒙りしかば、我が身の失に当たるの

い かよ ひとびと なか ごかんき

みならず、行き通う人々の中にも、あるいは御勘気、ある

しよりよう 召 みうち い

いは所領をめされ、あるいは御内を出だされ、あるいは

ふぼ きようだい す っ ひと す 果

父母・兄弟に捨てらる。されば、付きし人も捨てはてぬ。

いま っ ひと

今また付く人もなし。

こと こんど ごかんき しぎい およ おも

殊に今度の御勘気には死罪に及ぶべきが、いかが思われ

さどのくに 遣 か くに おもむ もの し

けん、佐渡国につかわされしかば、彼の国へ趣く者は死は

おほ しょう まれ

辛

い 着

さつがい

多く生は希なり。からくして行きつきたりしかば、殺害・

むほん もの

おも おも

かまくら い

謀叛の者よりもなお重く思われたり。鎌倉を出でしより、

ひび ごうてき 重

ひと ねんぶつ じしや

日々に強敵かさなるがごとし。ありとある人は念仏の持者

の い やま い

側 平 そうもく かぜ したか

なり。野を行き、山を行くにも、そばひらの草木の風に随

こえ 敵 われ せ

覚 漸

つてそよめく声も、かたきの我を責むるかとおぼゆ。ようや

くに っ ほつこく なら

ふゆ こと かぜ ゆき

く国にも付きぬ。北国の習いなれば、冬は殊に風はげしく雪

ころもうす じき 乏

たちばな じねん

ふかし。衣薄く、食ともし。根を移されし橘の自然に

枳

み うえ 抓 知

すみか

からたちとなりけるも、身の上につみしられたり。栖には、

尾 花 刈 萱 生 茂 のなか ごさんまい 原

落

おばな・かるかやおいしげれる野中の五三昧ばらに、おち

破

そうどう

うえ

あめ漏

かべ

かぜ

溜

ほとり

やぶれたる草堂の、上は雨もり、壁は風もたまらぬ傍に、

ちゅうやみみ き

枕

牙

かぜ

おと

ちようぼまなこ

さえぎ

昼夜耳に聞くものは、まくらにさゆる風の音、朝暮眼に遮

おちこち

みち

うず

ゆき

げんしん

が きどう

へ

かん

るものは、遠近の路を埋む雪なり。現身に餓鬼道を経、寒

じごく

お

か

そぶ

じゅうくねん

あいだ こころ

とど

ゆき

地獄に堕ちぬ。彼の蘇武が十九年の間胡国に留められて雪

しよく

りりよう

がんくつ

い

ろくねんみの

着

過

を食し、李陵が巖窟に入つて六年蓑をきてすごしけるも、

わ

み

うえ

我が身の上なりき。

いま

ごかんき

許

かまくらじゆう

今、たまたま御勘気ゆりたれども、鎌倉中にもしばらく

み

宿

あと

留

ところ

さんちゆう

も身をやどし迹をとどむべき処なければ、かかる山中の

いし

狭

間

まつ

もと

み

かく

こころ

しず

だいち

じき

石のはざま・松の下に身を隠し心を静むれども、大地を食

そうもく

き

ほか

じき

ころも

た

とし草木を着ざらんより外は食もなく衣も絶えぬるところ

おんこころ根

搔分

おんとぶら

ろに、いかなる御心ねにて、かくかきわけて御訪いのあ

し

かこ

われ

ふぼ

おんたましい

おんみ

い

替

るやらん。知らず、過去の我が父母の御神の御身に入りか

たも

し

だいかくせせん

おん

恵

わらせ給うか。また知らず、大覚世尊の御めぐみにやある

なみだ

抑

そうら

らん。涙こそおさえがたく候え。

と

い

しょうか

おおじしん

ぶんえい

だいすいせい

問うて云わく、そもそも、正嘉の大地震、文永の大彗星を

み

じた

ほんぎやく

わ

ちよう

ほけきよう

うしな

ゆえ

知

たも

見て、自他の叛逆、我が朝に法華経を失う故としらせ給

うゆえ、いかん。

こた

い

ふた

てんさいちよう

げてんさんぜんよかん

答えて云わく、この二つの天災地天は、外典三千余巻に

の

も載せられず。三墳五典・史記等に記するところの

だいちようせい

おおじしん

いつしやくにしやく

いちじようにじよう

ごじよう

大長星・大地震は、あるいは一尺二尺・一丈二丈・五丈

ろくじよう

いつてん

み

じしん

六丈なり。いまだ一天には見えず。地震もまたかくのごと

ないてん

かんが

ほとけごにゆうめつ いご

し。内典をもつてこれを勘うるに、仏御入滅已後は、か

だいずいしゆつたい

がつし

ほつしやみつたらおう

ごてん

ぶつぼう

かる大瑞出来せず。月支には、弗沙密多羅王の五天の仏法

ほろ

じゅうろくだいこく

じとう

や はら

そうに

こうべ

刎

を亡ぼし、十六大国の寺塔を焼き払い、僧尼の頭をはね

とき

ずい

かんど

かいしようにんし

じいん

し時も、かかる瑞はなし。漢土には、会昌天子の、寺院

しせんろつぴやくよしよ

そうににじゅうろくまんごひやくにん

げんぞく

四千六百余所をとどめ、僧尼二十六万五百人を還俗せさせ

とき

しゆつげん

わ ちよう

きんめい

ぎよう

ぶつぼうわた

し時も出現せず。我が朝には、欽明の御宇に仏法渡つて、

もりやぶつぼう

てき

きよもりほつししちだいじ

や

うしな

さんそう

守屋仏法に敵せしにも、清盛法師七大寺を焼き失い、山僧

とうおんじようじ

しようもう

しゆつげん

だいすいせい

まさ

し

等園城寺を焼亡せしにも出現せざる大彗星なり。当に知

だいじ

いちえんぶだい

うち

しゆつげん

るべし、これよりも大事なることの一閻浮提の内に出現す

かんが

りつしようあんこくろん

つく

さいみようじのにゆうどうどの

べきなりと勘えて、立正安国論を造つて最明寺入道殿

たてまつ

か じよう

い

せん と

だいずい

たこく

に奉る。彼の状に云わく〈詮を取る〉「この大瑞は、他国

くに 亡

せんちよう

ぜんしゆう

ねんぶつしゆうとう

よりこの国をほろぼすべき先兆なり。禅宗・念仏宗等が

ほけきよう

うしな

ゆえ

か

ほつしばら

くび

斬

かまくら

由比

法華経を失う故なり。彼の法師原が頸をきりて、鎌倉・ゆい

はま

捨

くにまさ

ほろ

とううんぬん

の浜にすてずば、国当に亡ぶべし」等云々。

のち

ぶんえい

だいすいせい

とき

て

握

その後、文永の大彗星の時は、また手ににぎりてこれを知

し

る。い 去ぬる文永八年九月十二日の御勘氣の時、重ねて申し

て云わく「予は日本国の棟梁なり。い 我を失うは国を失う

なるべし」と。いま 今は用いまじけれども、後のためにとて申し

にき。こぞ また去年の四月八日に平左衛門尉に對面の時、「蒙

古国は、こころ いつごろかよせ候べき」と問うに、寄 答えて云わ

く「きょうもん 経文は月日をささず。がつぴ ただし、天眼のいかり頻りなり。指

ことし 今年をばすぐべからず」と申したりき。もう

し これらはいか^しとして知るべしと人疑うべし。ひとうたが 予不肖の

身なれども、み 法華經を弘通する行者を王臣・人民これを怨ほけきょう

むあいだ、法華經の座にて守護せんと誓いをなせる地神、

怒 ほけきよう ざ しゆご ちか み 震 てんじん み ひかり い

いかりをなして身をふるい、天神、身より光を出だしてこ

くに 脅 いさ もち けつく ひと み

の国をおどす。いかに諫むれども用いざれば、結句は人の身

い じかいほんぎやく たこく せ

に入つて自界叛逆せしめ、他国より責むべし。

と い しようこ

問うて云わく、このこと、いかなる証拠あるや。

こた きよう い あくにん あいぎよう ぜんにな じばつ よ

答う。経に云わく「悪人を愛敬し善人を治罰するに由る

ゆえ しょうしゆく ふうう みな とき おこな とう

が故に、星宿および風雨、皆、時をもつて行われず」等

うんぬん そ てんち くに みようきよう いま くに てんさいちよう

云々。夫れ、天地は国の明鏡なり。今この国に天災地天あ

し こくしゆ とが かがみ 浮

り。知るべし、国主に失ありということ。鏡にうかべた

あらそ

こくしゅしょうか

とき

てんきよう

れば、これを諍うべからず。国主小禍のある時は天鏡に

しょうさいみ

いま だいさい

まさ

し

たいか

小災見ゆ。今の大災は、当に知るべし、大禍ありというこ

にんのうきよう

しょうなん

むりよう

ちゅうなん

にじゅうく

だいなん

とを。仁王経には、小難は無量なり、中難は二十九、大難

しち

きよう

いち

にんのう

な

に

は七とあり。この経をば、一には仁王と名づけ、二には

てんちきよう

な

こくしゅ

てんちきよう

うつ

み

めいはく

天地鏡と名づく。この国主を天地鏡に移して見るに明白な

きようもん

い

しょうにんさ

とき

しちなんかなら

り。またこの経文に云わく「聖人去らん時は、七難必ず

お

とううんぬん

まさ

し

くに

だいしょうにんあ

起こらん」等云々。当に知るべし、この国に大聖人有りと。

し

か

しょうにん

こくしゅしん

また知るべし、彼の聖人を国主信ぜずということ。

と

い

せんだい

ぶつじ

うしな

とき

なん

ずい

問うて云わく、先代に仏寺を失いし時、何ぞこの瑞なき

や。

こた

い

ずい

とが

きようじゅう

だいしように

答えて云わく、瑞は失の軽重によりて大小あり。この

たび

ずい

あや

いちどにど

いっぺんにへん

度の瑞は怪しむべし。一度二度にあらず、一返二返にあら

としつき

経

さか

ず。年月をふるままに、いよいよ盛んなり。これをもつて

さつ

せんだい

とが

す

こくしゅ

とが

これを察すべし、先代の失よりも過ぎたる国主に失あり。

こくしゅ

み

ばんみん

ころ

ばんしん

ころ

ふぼ

ころ

国主の身にて万民を殺し、また万臣を殺し、また父母を殺す

とが

しょうにん

あだ

かれ

す

失よりも、聖人を怨むこと、彼に過ぐることを。

いま

にほんこく

おうしん

ばんみん

がつし

かんどそう

今、日本国の王臣ならびに万民には、月氏・漢土総じて

いちえんぶだい

ほとけ

めつごにせんにひやくにじゅうよねん

あいだ

一閻浮提に仏の滅後二千二百二十余年の間いまだなき

たいか ひと

大科、人ごとにあるなり。

たと

譬えば、十方世界の五逆の者を

いっしょ あつ

一処に集めたるがごとし。この国の一切の僧は皆提婆・

くぎやり たましい うつ こくしゅ あじやせおう はるりおう けしん

瞿伽利が魂を移し、国主は阿闍世王・波瑠璃王の化身な

いっさい しんみん うぎようだいじん がつしようだいじん せつだ ぎりとう あくにん

り。一切の臣民は雨行大臣・月称大臣・刹陀・耆利等の悪人

集 にほんこく たみ いにしえ ににんさんにん ぎやくざい

をあつめて日本国の民となせり。古は、二人三人、逆罪・

ふこう もの ひと ざいしよ だいち わ い

不孝の者ありしかばこそ、その人の在所は大地も破れて入

いま くに じゅうまん ゆえ にほんこく だいちいちじ

りぬれ。今はこの国に充滿せる故に、日本国の大地一時に

破 むけん お い ほか いちにんにん じゅうしよ お

われ無間に堕ち入らざらん外は、一人二人の住所の墮つべ

様 れい ろうにん いち に しらが ぬ ろうもう

きようなし。例せば、老人の一・二の白毛をば抜けども、老耄

の時は皆白毛なれば、何を分けて抜き捨つべき。ただ一度に
剃り捨つるごとくなり。

問うて云わく、汝が義のごとくんば、我が法華經の行者

なるを用いざるが故に天變地天等ありと。法華經第八に云

わく「頭破れて七分に作る」。第五に云わく「もし人、惡み

罵らば、口は則ち閉塞せん」等云々。いかにぞ、数年が間

罵るとも怨むとも、その義なきや。

答う。反詰して云わく、不輕菩薩を毀訾し、罵詈し、打擲

せし人は、口閉・頭破ありけるか、いかに。

と

きょうもん そうい

問う。しかれば、經文に相違すること、いかん。

こた

ほけきよう

あだ

ひと

ににん

いちにん

せんじよう

ぜんこん

答う。法華經を怨む人に二人あり。一人は先生に善根あ

こんじよう

えん

もと

ぼだいしん

おこ

ほとけ

もの

りて、今生に縁を求めて菩提心を発して仏になるべき者

くちと

こうべわ

いちにん

せんじよう

ぼうにん

は、あるいは口閉じ、あるいは頭破る。一人は先生に謗人

こんじよう

ぼう

しろうじよう

むけんじごく

ごう

じようじゆ

もの

なり。今生にも謗じ、生々に無間地獄の業を成就せる者

罵

くち

すなわ

へいそく

たと

ごく

あり。これは、のれども口は則ち閉塞せず。譬えば、獄に

い

しがい

さだ

もの

ごく

なか

ひがごと

入つて死罪に定まる者は、獄の中にていかなる僻事あれど

しがい

おこな

べつ

とが

許

もの

も、死罪を行ふまでにて別の失なし。ゆりぬべき者は、

ごくちゆう

ひがごと

戒

獄中にて僻事あればこれをいましむるがごとし。

と 問うて云わく、
このこと第一の大事なり。
委細に承る

べし。

こた 答えて云わく、
ねはんぎよう 涅槃經に云わく、
ほけきよう 法華經に云わく、
い うんぬん 云々。

にちれん 日蓮
かおう 花押